ハンガリーの東洋学研究(1)

ジョルジュ＝ハザイ

一

ハンガリーにおける東洋学研究の過去・現在の状態を、短時間にくわしくお話しすることはとてもできまいと思います。われわれが利用できる書物・論文などの資料は、すでに一世紀以上も前から出版されており、テーマから見ても、研究活動の領域はきわめて多岐にわたっています。

ハンガリーでは、東洋学は、その民族的な学問分野の一つであります。この特徴は、それが独自の発展をとげてきたことに由来しています。ハンガリーの東洋学の出発点はチュルクートルコ学研究(2)にあります。そして東洋学のこの領域は、ハンガリー、チュルク両民族が何世紀にもわたつて接触してきたために、ハンガリー語研究、ハンガリー民族の歴史学的・民族学的研究ときわめて密接に関連しておりました。このことが、ハンガリーの東洋学の誕生・成長のもつとも重要な特徴の一つであつたのです。東洋学のほかの諸分野の研究――モンゴル学・ティベット学・中国学・イラン学――はもつと後になつてあらわれてきましたが、チュルク学は、これらもろもろの学問分野の発展にも大きな影響を与えました。このことは、とりわけ、それらにおけるテーマおよび研究方向の選択にはつ

きりあらわれました。このようにして、これら東洋学の全領域はたがいに補足しあいつつ一つの全体として発達し、民族的学問活動に重要な役割を演じつづけてきたのであります。

二

本題に入るに先だつて、上述の点、つまり、ハンガリーにおける東洋学研究の発展を考えるさい無視しえないハンガリー、チュルク両民族の接触・関係史について少しのべておくのも無駄ではありますまい。

ハンガリー、チュルク両民族の接触は、ハンガリー民族史上知られうる最古の時代、じつさい、ハンガリー民族の起源にまでさかのぼり、その最初の根跡は、すでに、ハンガリー民族の原住地においてこれを認めることができます。

最近の学説によると、ハンガリー民族は、人種的・言語的に見て、フィン-ウゴル（Finno-Ugric）諸族にぞくしています。その原住地は、十中八九、東部ヨーロッパ、ウラル山脈の西麓、ヴォルガ、カマ両河の流域地方にあつたと考えられます。その時代は、比較言語学的研究および考古学的発掘の成果からする諸説が確かだとすれば、紀元前二千年から紀元後五百年ごろまでの時期に当ります。すなわち、ハンガリー民族は、紀元前二千年より紀元後五世紀末にいたるあいだ、その故地に住んでいたと思われるのであります。

チュルク民族の原住地については、さまざまな学説が出されていて、まだはつきりしたことは申せません。しかし、あらゆる学者が一致して主張している一点があるとすれば、それは、チュルク諸族の原住地はウラル山脈以東

に求めらるべきだということであります。チュルク諸族がきわめて古い時代に広大な領域にわたつて散居し、ハンガリー民族が上述の原住地、ヴォルガ、カマ両河流域地方にいたころ、チュルク諸族の集団の中に、西シベリアに住んでいたものがあつたことは、これを疑うことができません。ハンガリー語の中に最古代チュルク語からの借用語がありますが、これでもわかるように、ハンガリー、チュルク両民族が最初に接触したのは、すでにこの時期にまでさかのぼれるのであります。

先史学者たちはつぎのように推定していますが、これは正しいと思われます。すなわち、ハンガリー民族は、チュルク諸族の移動の波におされて、五世紀末に原住地をすてて西進し、黒海地域へ移動して、その方面で、チュルク諸族とさらにいつそう緊密な関係をもつにいたつた、――とこういうのです。この密接な接触・交渉をしめすのは、マジャール民族をハンガリー民族(Hungarian)、オングルワ(Hongrois)、ウンガール(Ungar)などと呼ぶ周知の名称でして、これは、マジャール民族がオノグル-チュルク族(Onogur-Turks)と一つの政治的集団を形成していたことを示す一証であります。それだけでなく、ハンガリー語のなかに古代チュルク語からの借用語が豊富に存在していることもまた、両者間に緊密な接触・交渉が存在した事実を証明しています。これらの借用語はすべてr型に属するチュルク語に由来し、チュルク諸言語の歴史を究明する上で重要な資料をなすものですが、それらは、ハンガリー民族が、長期にわたつて、さまざまの遊牧チュルク諸族と緊密な一社会をつくつていたことをはつきりと物語つております。

今日のハンガリー領に拠るにいたつたハンガリー諸部族がチュルク民族の扮装をして歴史の舞台に登場し、諸年

代記作者がかれらとチュルク民族との差異を認めず、いや、さらには、かれらをしばしばチュルクとさえ呼んでいるのはけつして偶然ではありません。これは、ハンガリー民族の移動につれて東方のステップからその最終的住地へ持ちこまれた遺産でありますが、また、一九世紀中葉のハンガリー文献学者・先史学者たちのなかに、誤つて、ハンガリー民族の起源を、フィン-ウゴル諸族群のなかにではなくチュルク諸族群のなかに求めたものが何人かいたのもこのためだつたのです。

ハンガリー民族は、九世紀に現在の地に到達し、そこで、遊牧生活から脱却するとともに一独立国家をたてました。

しかし、これらは、チュルク民族との交渉がとぎれたことを意味するものではありませんでした。ウズ〈オウズ(Uz〈Oğuz)、ペチェネグ(Pečeneg)、クン(Kun)、クマン(Kuman)など、数多くの遊牧チュルク諸族が、ステップ諸民族の伝統にしたがつて、一一—一三世紀に、カルパティア山脈の南方の盆地に移動してきました。かれらの或るものはこの地域に侵入してハンガリー民族と戦いを交え、また或るものは、それとともに、そこに居住することを願つて許されました。この結果、ハンガリー、チュルク両民族の接触史上新らしい局面が開けることになりました。

カルパティア盆地に移住してきたペチェネグ、クン両族はその人種的・言語的独立をそう長く維持することができず、かれらは、間もなくハンガリー民族に吸収されてしまいました。ハンガリーにペチェネグ語およびクン語の地名があるだけでなく、この時代のハンガリー語のなかにチュルク語の借用語が見出されるのは、まさしく、当時

におけるハンガリー、チュルク両民族間の関係の根跡をとどめているものといえます。

一三―一四世紀の交にアナトリアで勃興したオスマン朝の領土拡大は、一五―一六世紀には最高潮に達しつつありました。かれらのヨーロッパ進出にたいする最大の障害はハンガリー王国で、これは、一世紀以上にわたつて、征服者オスマン-トルコ軍に抗戦しつづけました。しかし、オスマン-トルコは、ついに、一六世紀の中ごろ、ハンガリー民族の抵抗を排除するのに成功いたしました。かれらの決定的勝利をもたらす機縁となつたのは、一五二六年のモハーチュの戦闘、ついでおこつた首都ブダの占領でありました。この結果、オスマン-トルコは、ハンガリーの国土の三分の一を一世紀半の長きにわたつて占領することになりました。オスマン-トルコのハンガリー支配は、いうまでもなく、トルコがハンガリーに言語的・文化的影響をおよぼす大きな原因となりました。

オスマン-トルコの勢力は一七世紀の末にハンガリーから退きました。だからといつて、両者の関係が断絶したわけではありません。いや、事態はまつたく逆で、そののちにも、両者間に新らしい結びつきが発展し、新らしい関係が生まれました。しかし、これらのすべてについてのべるのは本日の講演の範囲外ですので、ここでは省略いたします。

チュルク研究が、ハンガリー民族そのものの言語および歴史の研究と切つても切れぬ関係にある理由、チュルク学が、ハンガリーにおいて、そこではチュルク語が用いられていないにもかかわらず、その民族的学問と見なされている理由は、上にのべたところから明らかであろうと思います。

もし、チュルク諸民族・諸言語の歴史を研究しないならば、ハンガリー民族・言語の歴史における数多くの問題

を解明することはけつしてできないでありましよう。遊牧チュルク諸族の歴史を知れば、ハンガリー民族の先史時代・中世史に関する幾多の問題を究明することができるのです。千五百年以上もの間にハンガリー語へ入つてきたブルガール語・ペチェネグ語・クマン語・オスマン-トルコ語などのチュルク語の借用語の研究、また、時代を異にするそれぞれの層を分離・分析する仕事は、チュルク諸語についての完全な知識なしには不可能でありましよう。そして、最後に、ハンガリー民族史上の重要な一時期は、オスマン-トルコ語史料、たとえば諸年代記・文書、徴税台帳などの諸記録そのほかを研究しなければ、これを容易に叙述することはできないでありましよう。

したがつて、ハンガリーのチュルク学の対象には、チュルク学一般のもつあらゆる問題、チュルク諸族・諸言語の歴史の基本的諸問題がふくまれ、と同時に、そこでは、オスマン-トルコの歴史的・言語的研究に、ことのほか注意が払われるのであります。

ハンガリーのチュルク学の研究計画は、ハンガリー学そのものの内面的要求から出てくるものであります。ハンガリー、チュルク両民族の関連の深さが、問題を提起し研究する動機であります。しかし、いまや明らかなように、問題の解明に要求されるのは、広範囲なチュルク学的背景、とりわけ、チュルク学一般の内面的要求からする計画、また、ときとしては、おそらくただ起源的にだけ見ればハンガリー民族とそれほど密接な関係がないようにも思われる計画の実現であります。これらの要素が、過去のみならず現在の研究活動を特徴づけているのであります。と同時に、先に触れましたように、チュルク学研究は、或る程度までこれと緊密な関係を保ちつづけてきた他の東洋学研究の分野の動向にも重要な刺戟を与えたのです。

三

何よりもまず現状如何が皆様の関心のまとだと思われますので、今日の講演では過去の研究状況についてはあまり申しませんが、話を進める便宜上、きわめて簡単にそれにも触れておきたいと考えます。

ハンガリーの東洋学研究のはじまりということになれば、一九世紀の前半にまでさかのぼらねばなりません。ハンガリー東洋学の創始者はアンタル=レグリ（Antal Reguly）であります。かれのロシア旅行の主目的はフィン-ウゴル諸言語の調査だったのですが、かれは、その旅行中に注目すべきチュヴァシュ語資料を蒐集いたしました。この資料は、のちになって、ヨージェフ=ブデンツ(József Budenz)の手でくわしく検討の上出版されました。このすぐれたハンガリーの文献学者ブデンツの関心はしだいに広がってゆきましたが、それに主要な役割を果したのは、多分、「ウラル-アルタイ語仮説」だったと思われ、かれは、同時に、タタール語・チャガタイ語・オスマン-トルコ語にも研究領域を拡大して、チュルク文献学上の各種の問題について多数の論文を発表しました。

しかし、東洋学の本当の基礎がきづかれたのは一九世紀の後半になってからのことで、それは主としてアールミン=ヴァーンベーリ（Ármin Vámbéry）によってでありました。かれがその諸労作を発表してから長い年月、或るものではまるまる一世紀が過ぎさりました。ですから、それらが、若干の例外をべつにすると、今日ではまったく時代遅れになってしまったと考えられているとしてもけっして不思議ではありません。

とはいうものの、当時にあっては、学者たちは、一般的なチュルク学全体にたいへん貢献いたしました。ヴァー

ンベーリは、一八六三―六四年に敢行した大胆きわまる旅行で急に世界的名声を博しましたが、かれは、まず、研究の注意をチュルク民族の東方分派にむけたことによつて、チュルク学に非常に寄与いたしました。すなわち、かれは、カラハン朝、チャガタイ語・ウズベク語の文献の記録を幾つか出版し、チュルク諸語の語源辞典の編纂を試み、さらに、民族学的・民族誌学的・文献学的観点からするチュルク諸族についての包括的な叙述を残しました。

アールミン=ヴァーンベーリの活動についてもう一つだけあげておきます。ブダペシュト大学は、かれのために、前世紀六〇年代の中葉に、独立したチュルク学講座を開設いたしました。これは、ヨーロッパ諸大学における最初のチュルク学講座の一つであります。この事実は、チュルク学研究の重要性をはじめて認めたのがほかならぬハンガリーの学界であつたということのまぎれもない証拠であります。

一九―二〇世紀の交、およびそれにつづく時期において、ハンガリーのチュルク学研究計画は非常に拡大されました。ガーボル=バーリント（Gábor Bálint）のタタール語研究、ヨージェフ=トゥーリ（József Thury）のチャガタイ語研究、ヴィルモシュ=プローレ（Vilmos Pröhle）のバシュキール語研究、ジュラ=メーサーロシュ（Gyula Mészáros）のチュヴァシュ語研究は、いずれもヴァーンベーリの伝統をうけついだものであります。これらと同時に、オスマン=トルコ語の文法・歴史・諸方言の研究もまた登場してまいりました。ガーボル=バーリント、ヨージェフ=トゥーリのほかに、すぐれた方言学者・民俗学者であるイグナーツ=クーノシュ（Ignácz Kunos）の名前もあげておかねばなりません。

ハンガリー語における古代チュルク語借用語の研究は、ベルナート=ムンカーチ（Bernát Munkácsi）とゾルター

ン=ゴンボッ（Zoltán Gombocz）との業績に基礎をおいており、これについて最初のモノグラフを発表したのはゴンボッであります。[3] 当時の国際的な言語学からする要求が、ゴンボッにとつては、そのすべての研究の規準であり、この結果、ハンガリーのチュルク学の言語学的研究は、方法論的にめざましい進歩をとげることになりました。今世紀の初頭に、とくにイムレ=カラーチョン（Imre Karácson）の研究によつて、歴史的研究の先鞭がつけられましたが、それは、トルコの古文書館に所蔵されたハンガリー関係のオスマン-トルコ語文書の研究であります。

いままであげてきたような諸学者がハンガリーのチュルク学、したがつてまた、さらに広くは東洋学の基礎をきづき、その後の研究活動は、長期にわたつて、基本的には、かれらのしいた路線にそつて行なわれてまいりました。今日の講演の中心である比較的最近および現在における研究は、こうした地盤から成長してきたものであります。

四

わたしは、ここでは、まずテーマ、研究計画の展開のあらましだけに言及するということを、前もつてお断りしておきたいと思います。この概観の中で、ほかでも知れるような文献目録をとくにあげるつもりはありません。それらのこまかい点については、この講演のあとで、または個人的な意見交換の場でお伝えできると思います。

歴史的に概観しましたさいすでに申しましたとおり、ハンガリーのチュルク学の一分野は、先史時代のハンガリー民族とチュルク民族との関係、および、ハンガリー語に入つた古代チュルク語借用語の研究であります。テーマの性質上出てくる諸問題の範囲の重要性は、ハンガリー文献学・ハンガリー史のわくからはるかにはみ出ます。よ

く知られていますように、ハンガリー語における古代チュルク語借用語の問題は、チュルク語比較言語学、チュルク語とモンゴル語との関係、したがつて、「アルタイ語仮説」そのものに関する研究の中心をなしております。

これらの借用語は、r型に属する一つのチュルク語、おそらくは古代チュヴァシュ語か、またはそれに近い一方言からハンガリー語に入つたものです。これまたよく知られているとおり、問題の鍵をにぎる重要なこの型の言語の歴史の資料的解明は、チュルク諸語のなかでもつとも遅れているのであります。

ハンガリー語中のこれらの借用語は、ゾルターン=ゴンボツ以来、学術的文献ではブルガール-チュルク語として知られていますが、それらは、今日では、r型のチュルク諸語の発展上におけるこの段階の、唯一ではないにしても、たしかにもつとも重要なしかももつとも信憑すべき名残り・記録と見なさるべきものなのです。

このテーマと諸問題とについてはじめて概観し、ハンガリーおよびチュルク言語学においてそれらが占める地位を指摘したゾルターン=ゴンボツの労作は、第一次世界大戦前に出版されました。それ以後半世紀以上が経過し、その間に、われわれのこれに関する知識はたいへん広くなつてきました。

チュルク諸文語・諸方言の辞典、各種の言語的記録の出版の結果、この研究を進めるための新らしくて広い基礎がきづかれました。過去数十年間に非常に多くの語源研究が編纂され、それらは、われわれの知識の拡大に大いに貢献いたしましたが、それは上の事実に由来しているのです。

進歩をしめすのは、たんに資料が豊富になつたことや、それにつれて語源研究の出版が増加したことばかりではありません。チュルク語比較言語学は、ここ数十年のあいだにめざましく発展いたしました。われわれは、言語的

諸記録からは実証されないチュルク諸語の時代について、また、モンゴル語とチュルク語との関係について――アルタイ語の親縁関係についてのわれわれの意見はしばらくおくとしても――、まつたく新らしい見解を得るにいたつたのであります。このような進歩のための主要な条件が、新らしい諸観点を考慮にいれ、これらと、ブルガール-チュルク語借用語研究から引き出された諸事実とを結びつけた点にあつたことははつきりしております。

このようにして、過去数十年のあいだに数多くの語源研究が生まれただけでなく、また、誰よりもまずラヨシュ=リゲティ（Lajos Ligeti）の手で、非常に重要な理論的研究も幾つか発表されました。これらは、年代的・方言的な形に応じて借用語資料をできるだけ分離し、そして、上述の一般的諸問題の曖昧な点を明らかにしようとする一つの試みでありました。

いずれにせよ、機が熟して、このテーマをモノグラフの形で論ずるために新らしい概観書を作成すべきときがきました。この仕事は、ハンガリー語の言語学的研究のがわから特別の刺戟をうけています。すなわち、ハンガリー科学アカデミー言語学研究所で、新らしいハンガリー語語源辞典が編纂されつつあり、その第一巻が昨年出版されたのであります。[4] この事業のためには、いままでに知られているあらゆる資料およびさまざまの学説に完全な淘汰を加えることが必要でしたし、今日なお必要とされています。これはまた同時に、研究が、いま行なわれている総合作業の準備というきわめて重要な一段階を乗りこえつつあることを示しております。

これらのことは、われわれに、ハンガリー語におけるブルガール-チュルク語についての新らしいモノグラフが、これまた、おそらくラヨシュ=リゲティによつて、遠からず発表されうるだろうという希望をいだかせるのであり

ます。

五

古代におけるハンガリー、チュルク両民族間の関係についての、ハンガリーのチュルク学研究の第二に重要な活動分野は、ハンガリー民族の先史時代の諸問題を対象といたします。

ところで、ハンガリー語中のブルガール-チュルク語借用語の範囲を明らかにし、さらに進んで、それらを具体的なチュルク諸族またはチュルク言語群とむすびつけるためには、何としても、ステップにおけるハンガリー民族の移動にさいして果したチュルク民族の役割を知らねばならぬことは自明の理であります。しかし、この研究は、ただたんに言語学的な見地からだけでなく、何よりも、歴史学的なそれからも重要であります。ハンガリー民族の先史時代の諸問題を究明するためには、どうしても、そのころステップに居住していた遊牧チュルク諸族の歴史が明らかにされねばなりません。ハンガリー民族は、この時期に、長期にわたりチュルク諸族ときわめて緊密な関係にあつて、時には政治的連合を形成し、したがつて、数世紀のあいだかれらと共同の歴史を有していたのでした。

この点について史料が欠けていることは周知の事実であります。オルホン諸碑文をのぞくと、チュルク諸族は、歴史的研究の史料となりうるような記録を、数世記を通じて何ひとつ残しませんでした。そこで、先史時代におけるハンガリー民族とチュルク諸族との関係を考えようとする学者たちは、同時代の近隣諸族の報告に依拠しております。つまり、ステップの歴史の他の研究におけると同様、中国・ビザンツ・アラビア語の史料がそれであります。

このテーマを分析した最初の包括的な業績は、一九三〇年、ジュラ＝ネーメト(Gyula Németh)によつて発表されました。(5) この労作は、当時にあつては、この種の研究の発展路上での重要な一里程標たるの意味をになつていました。それは、ハンガリー民族の人種的・言語的起源におけるチュルク民族との関係についての議論にはつきりと終止符をうちました。ジュラ＝ネーメトは、この問題領域にチュルク学の方面から接近して、ハンガリー民族の人種的・言語的特徴におけるチュルク民族の根跡の範囲を明確に限定し、それらが二義的な役割しか果さなかつたことを証明いたしました。かれの業績にあらわれた方法論的にもつとも重要な新機軸の一つは、新らしい資料群を導入しようと試みたことでした。ここにいわゆる新らしい資料群とは、チュルク民族の人種的構成（部族・氏族そのほか）の名称、地名および人名から成つています。ジュラ＝ネーメトは、これらの名称の形成に反映している諸事実に拠つて歴史的諸過程を究明しようとつとめ、また、遊牧諸族の移動の歴史的背景に関するわれわれの知識をひろめようと努力いたしました。

過去ほとんど四〇年間に、チュルク諸族の民族学的研究は急速な発展をとげてきました。チュルク民族の人種的名称についてわれわれの利用できる資料の増加にはめざましいものがあります。ジュラ＝ネーメトは、目下、この資料を批判し選択する作業に従事しています。その目的とするところは、先史時代のハンガリー民族とチュルク民族との関係について新らしいデータ、新らしい論拠を得ることにあります。

これらのことは、最近顕著になつてきた、ネーメトの古くからの計画の実現を促進せずにはおきません。こうして、かれは、一九三〇年出版の旧著を増補して外国語で出版することにしたのであります。

チュルク諸族の歴史に関するビザンツ史料の研究は、ジュラ=モラヴチク(Gyula Moravcsik)がこれを行なっています。かれは一九四〇年代に Byzantino-Turcica と題する内容豊かな書物を出版しましたが、これは、ステップの歴史についてのもつとも重要な手引きの一つであります。その後の一五年間に発展した研究の成果をすべて正確に盛りこんだ同書の増補第二版は一九五八年に出版されました。(6)

それ以後、この分野における個別的問題をとりあげた幾つかの研究が、ジュラ=モラヴチク、ヤーノシュ=ハルマッタ(János Harmatta)両者によつて発表されました。ハルマッタは、比較的長文の論攻のなかで、初期のビザンツ—チュルク関係つまり両者間の使節派遣の問題をあつかいました。かれはこの論文のなかで、新らしいデータを多数調べあげ、こまかい点における曖昧な問題を数多く解明するのに成功いたしました。

もう一人のステップ研究家カーロイ=ツェグレーディ(Károly Czeglédy)は、主としてムスリムおよびコーカサス史料に注目して、これらの伝えるところと、ほかの諸史料から得られる諸事実とを連関づけようとつとめています。かれは、目下、一〇世紀以前のステップ諸族についてやや大部のモノグラフを執筆中であります。トクズ—オグズ(Toquz Oruz)とウイグルとの関連の問題、ハザール民族史上の各種の問題、クマン、クン両族の起源そのほかをあつかつたその比較的短い研究——いずれもハンガリー語で書かれています——は、上述した大部の概観の前触れと考えられます。かれの研究のなかには、種々の史料に見える地理的叙述の混乱や、ステップの歴史地理上の曖昧な点の解明をとりあげたものがあります。

六

中世におけるハンガリー、チュルク両民族間の関係についての研究の中心にすえられているのは、二つのキプチャク-チュルク族――ペチェネグ、クンまたはクマン族――であります。歴史を簡単に要約したさいすでに言及しましたように、かれらのうちかなりのものが今日のハンガリー領内に住みつきハンガリー民族と融合いたしました。歴史的諸記録に残つているペチェネグ語およびクン語の地名・人名の研究は、二人の学者、ジョルジュ=ジョールフィ(György Györffy)とラースロー=ラーショニュ(László Rásonyi)とが、その主たる目的とするところであります。

この両者は、語源および移住史の諸問題を対象とする多数の研究を公けにしました。ハンガリー科学アカデミー歴史学研究所は、ジョルジュ=ジョールフィに、浩瀚な歴史的地名辞典の編纂を委託いたしました。ハンガリーの中世諸文書中の豊富な資料がこの著者の典拠になつており、その第一巻はすでに出版されました。(7) この書物によつて、ハンガリーにおけるキプチャク語地名の資料が相当増加するであろうことは疑う余地がありません。

ラースロー=ラーショニュの固有名詞研究は、上述のキプチャク語だけのわく内にとどまらず、全般的なチュルク語の部族名・地名・人名の資料をふくんでいます。ラースロー=ラーショニュは、ジュラ=ネーメトの示唆によつて、チュルク語固有名詞の歴史的目録の編纂に着手いたしました。今日までに、この企画のために厖大な量の資料が蒐集されました。このテーマについてはすでに幾つかの研究が発表されていますが、これらは、上述の事業の一

端をあらわしたものにすぎません。

七

ハンガリーのチュルク学でもつとも重要な、そしておそらくはもつとも進んだ領域の一つは、オスマン-トルコの歴史的・言語的研究であります。

すでに概観いたしましたオスマン-トルコとの多面的な歴史的・言語的諸関係に由来する学問的要請はさておくとするも、地理的に近いこと、史料・資料の利用が容易なことそのほかが、この研究分野の発展を促進したもつとも重要な動機であります。歴史的研究はラヨシュ=フェケテ(Lajos Fekete)の手で進められいます。かれは、オスマン-トルコ史研究者たちから最大の権威の一人として尊敬されております。ラヨシュ=フェケテは、トルコの古字体・古文書研究の創始者であります。かれの諸労作は、いろいろ違つた型のアラビア字体を体系的に概説し、同時に、広い範囲にわたる資料を研究者の利用に供しております。

かれの業績のなかでいちばん重要なのは、"Die Siyāqat-Schrift in der türkischen Finanzverwaltung"でして、これは、オスマン-トルコの経済・財政文書の複雑な字体を概説し、従来ほとんどまつたく知られていなかつたオスマン-トルコ経済史料の研究に一つの鍵を提供したものであります。(8)

かれの活動のもう一つの新らしくて重要な成果は、チュルク学の範囲外に見られます。すなわち、かれは、現在、近東・中東のさまざまの高級官庁、トルコのスルタンたち、ペルシアのシャーたち、中央アジアのハンたちの諸宮

廷から出されたペルシア語文書の出版を準備中であります。ペルシアの古字体・古文書へのこの手引きは、幾つかのチュルク諸族史の解明に重要な貢献をなす公文書の出版にほかなりません。

オスマン-トルコ語の言語学的研究には、いくぶん広い範囲がふくまれます。この研究の中心にすえられているのは、オスマン-トルコ語の歴史および方言学の諸問題であります。

オスマン-トルコ語史研究は、個々の言語的記録の分析と同時に、トルコ語の歴史的文法のさまざまのこまかい点および一般的諸問題にまで手をのばします。

言語的記録の研究では、何よりもまず、ほかの文字で転写された諸記録があつかわれます。周知のとおり、アラビア文字で書かれたトルコ語テキストにあつては、それに特殊な表音システムのために、もつとも重要な音韻論の問題が曖昧なままに残されています。この困難は、外国アルファベット——ラテン・ギリシア・グルジア文字——で写されたトルコ語テキストの援用によつて克服され、それを通じてこれらの諸問題に解答を与えることができます。

この種の数多くのテキストは、オスマン-トルコがハンガリーとバルカン半島とを占領している期間に書かれたものです。ジュラ=ネーメトとジョルジュ=ハザイ(György Hazai)とは、このようなテキストの幾つかの出版をてがけました。これらの記録のデータによつて、一六—一九世紀のトルコ語音韻論における多数の問題を解明し、さらに、トルコ語諸方言を理解し、歴史的方言研究をじつさいにはじめることができるようになります。と同時にまた、それによつて、たとえばトルコ語史の時代区分のような、歴史的文法における若干の理論的諸問題を提起する

機会が与えられます。この問題は、ジョルジュ=ハザイの公けにした幾つかの小論のテーマとなつております。

これらの諸問題がすべて方言学的研究と密接にむすびついていることはいうまでもありません。すなわち、まず、方言学が言語史上の曖昧な諸点を明らかにするのにもつとも効果的に寄与することは明白であります。この研究は、さらに、主として、バルカン半島におけるトルコ語諸方言の研究におよびますが、これは、たんに地理的な事情からだけでなく、上述の学問的理由からしても当然のことであります。

一編の大部の方言学的モノグラフ、幾つかのテキストの版本または研究が、このようにして、ジュラ=ネーメト、ジュジャ=カクク(Zsuzsa Kakuk)女史、ジョルジュ=ハザイによつて出版されました。これらの研究は、ただたんに方言を記述するにとどまらず、諸方言の広がりのなかでのそれらの位置を示すこと、つまり、諸方言の分類の問題に解答を与えることにも努力をそそいでいます。ジュラ=ネーメトは、独立した短文の一モノグラフのなかでも、バルカン諸方言の分類の問題をとりあつかつております。(9)

オスマン-トルコ語史の研究には、その資料が欠けていますので、借用語、とりわけ、隣接諸言語にとりいれられたオスマン-トルコ語借用語の研究から得られる知識が役に立ちます。このようにして、一六—一七世紀にハンガリー語へ入つたトルコ語借用語は、当時その領域内で話されていたオスマン-トルコ語を知るのに或る程度有益です。同じことは、バルカン半島の諸言語、ブルガリア語・セルビア-クロアティア語・近代ギリシャ語そのほかにおけるトルコ語借用語についてもいうことができます。

二人の研究者が、トルコ語史に関するこれらの特殊な資料を対象にしております。ジュジャ=カクク女史とジョ

ルジュ=ハザイとがそれで、前者はハンガリー語に入つた、また、後者はバルカン諸言語におけるトルコ語借用語の問題を、幾つかの論文のなかで分析しています。

これらはいずれも、トルコ語の歴史的文法・方言研究の複雑な現状の究明にいささかなりとも貢献しようとするもの、また、各種の資料から得られた知識を一つに総合しようとする試みにほかなりません。

八

ハンガリーのチュルク学には、ヴァーンベーリの活動以来、東部チュルク語諸文語の記録を研究する伝統も存在しています。これは、おそらくハンガリー学と直接には関連せぬ唯一のチュルク学分野であると申せましよう。しかし、ヴァーンベーリの踏み出した第一歩は、当時のチュルク学研究におけるもつとも重要な事件の一つで、ハンガリーで、このあとを追うものが輩出いたしました。なかでもとくに、誰よりも、まずヨージェフ=トゥーリとヤーノシュ=エックマン(János Eckmann)とがこの伝統を継承しました。

今日では、アンドラーシュ=ボドログリゲティ(András Bodrogligeti)が、この領域の発展につとめています。サイフィ=サライ(Sayfi Sarayi)による『グリスターン』のキプチャク語訳が、近いうちにかれの手で出版されることになつております。かれの文法的・韻律的研究は、さらに進んで、重要なキプチャク-チュルク語、フワーレズム-チュルク語の諸記録にもおよんでいます。

九

研究領域は、過去数年間の業績を基礎として、二つの新らしいチュルク語文語に広がりました。

アルメニア学からチュルク学に入つたオドン=シュッツ（Ödön Schütz）は、アルメニアーキプチャク語の諸記録の研究を専門とするにいたりました。かれは、比較的小篇の研究を幾つか公けにしたのにつづいて、最近、アルメニアーキプチャク語の一年代記を出版しましたが、これは、言語学的にも歴史学的にも興味ぶかいものといえます。

ウイグル文献学もまた、新らしい研究分野と考えられます。わたしは、新らしい研究者の養成を主な目的としてベルリンに滞在しておりますが、そこで、ドイツ科学アカデミー所蔵の「トゥルファンーコレクション」に親しく接し、アカデミーが新たに組織したトゥルファン研究班を指導することになりました。この研究班で、三人のチュルク学者、二人の中国学者、一人のイラン学者が調査・研究に当つています。

わたしは、ウイグル研究に従事しているために、日本の学者たちと親しく相識るようになりました。わたしどもは、ここ何年間かに、嶋崎昌、護雅夫、村山七郎、羽田明、藤枝晃、小田寿典諸氏など、日本から数多くの同学の士をむかえる機会を得、また、村山氏の発議、藤枝氏の斡旋で、竜谷大学の井之口泰淳氏を、さらに長期にわたつてベルリンへ招くことができました。井之口氏の造詣は、わたしどもにとつて、漢文資料の調査に、また、それらの目録の作成に、はかり知れぬ大きな助けでありました。こうして、われわれのあいだに、得るところきわめて多い協力関係が成立しましたが、これが、もつともつとつづき広がることを望んでやみません。

わたし自身の研究について申し上げますと、短文の一テキストの版本を、Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae XXI: 1, 1968, 1–14 に発表し、幾つかを現在印刷中です。これらのなかに、長文の仏教経典写本がありまして、これは、大体、"Die uigurische Version des Jin'gangjing mit den Gāthās des Meister Fu der Liang Dynastie nebst Vorwort" という表題で、わたしの助手ペテル＝ツィーメ (Peter Zieme) とわたしとの連名で、Türkische Turfantexte の第一一分冊として出版されるはずです。この問題について、わたしどもは井之口氏にとくに感謝いたしております。わたしどもは、ウイグル語テキストの漢文原本を見つけ出すのに同氏から多大の援助をうけました。また、同氏がその仏教学的研究の諸成果を要約した一論文をわたしどもの利用に供されたことにたいしても、お礼申し上げたいと思います。その論文は上掲の書物の付録として出版されるはずですが、これまた、われわれのあいだの協力関係のあらわれにほかなりません。わたしの訪日のいちばん重要な目的の一つも、こうした協力関係をさらに強化・拡大させるための新らしい可能性をさぐることにあるのです。

一〇

ハンガリーの東洋学におけるチュルク学以外の領域としては、内陸アジア研究、とりわけモンゴル学・ティベット学をあげねばなりません。これらの学問領域のハンガリーにおける創設者はラヨシュ＝リゲティであり、また、研究方針を確立したのもかれであります。これらの領域はアルタイ言語学ときわめて緊密な関係をもつています。しかし、諸研究では、同時に、内陸アジアの歴史・文化に関するほかの多くの問題もまた考慮されております。

ラヨシュ=リゲティは、ハンガリーのアルタイ学研究の指導者であります。その学問的関心は、チュルク学からはじまつて満洲=トゥングース研究にいたるまで、アルタイ学の全領域におよんでいるだけでなく、ティベット学・中国学をもふくんでいます。しかし、かれの研究の中心をなしているのは、モンゴル語史、モンゴル語と他のアルタイ諸語との関係、モンゴル語資料の体系的研究であります。かれの教え子であるラヨシュ=ベシェ(Lajos Bese)、ジョルジュ=カラ(György Kara)、ラースロー=ローリンツ(László Lőrincz)、ゲーザ=ベトレンファルヴィ(Géza Bethlenfalvy)は、師の伝統をうけつぎながらも、それを発展させつつ研究に従つています。ラヨシュ=ベシェは現代モンゴル語の研究に当り、その文法研究に構造主義的方法を用いております。ジョルジュ=カラはモンゴル語資料および諸方言を研究し、ラースロー=ローリンツの研究の中心はモンゴル民俗学にあり、さらに、ゲーザ=ベトレンファルヴィは、各方面におけるモンゴル—ティベット関係の究明に従事しています。

ティベット学ではゲーザ=ウライ(Géza Uray)、タシュ=アンドラーシュ=ローナ(Tas András Róna)の名前をあげねばなりませんが、両者の本領はいずれも言語学的研究にあります。

中国学では、古代中国史・古代中国語、および、現代中国史・文学に関する研究があります。フェレンツ=トーケイ(Ferenc Tőkei)は古代中国の社会・哲学史、バルナバーシュ=チョンゴル(Barnabás Csongor)は中国—ウイグル関係史上の諸問題、イルディコー=エチェディ(Ildikó Ecsedy)嬢は中国と遊牧諸族との関係、とくに唐代における諸問題を、それぞれ研究しています。現代中国史研究にはシャーンドル=ヨージャ(Sándor József)が、現代中国文学研究にはパール=ミクローシュ(Pál Miklós)とエンドレ=ガルラ(Endre Galla)とが当つております。

イラン学を代表するのは、ジグモンド=テレグディ(Zsigmond Telegdi)とヤーノシュ=ハルマッタとで、前者は近代ペルシア語文法、後者は中世ペルシア諸語の研究に従つています。

むすび

本日の小講演はこれでおわります。わたしは、ここで、ハンガリーでこの学問領域を発展させたもつとも重要な動機を描こうとつとめてきました。本日の集会中に、または日をあらためて、これらに関することをもつとのべ、日本の同学の士にさらに多くの情報を提供できれば、わたしの喜びこれに過ぎるものはありません。今日の講演およびわたしの全研究旅行が、とくに、海山千里はなれてはいますが、相互の学問的関心事について、日本・ハンガリー両国の東洋学者間にさらに緊密な協力関係を発展させる目的にいささかなりとも役立つことを衷心から希望いたします。

(ハンガリー科学アカデミー研究員)
(護　雅夫　訳)

ハンガリーの東洋学に関する文献目録

一、一般的文献目録

Győrffy, Gy.: Történelmi bibliográfia [A magyar ős-történet bibliográfiája]. In: A magyarok elődeiről és a honfoglalásról, Budapest 1958, 231–234.

Kosáry, D.: Bevezetés a magyar történelem forrásaiba és irodalmába. I–III. Budapest 1951–58.

Moravcsik, Gy.: Byzantino-Turcica. I–II Berlin 1958.

二、東洋学の特殊領域に関する文献目録

Maravcsik, Gy.: Ungarische Bibliographie der Turkologie und der orientalisch-ungarischen Beziehungen 1914–1925. In: Kőrösi-Csoma Archivum 2/1926/,199–236.

Rásonyi, L.: Ungarische Bibliographie der Turkologie und der orientalisch-ungarischen Beziehungen 1926–1934.

In: Kőrösi Csoma Archivum 1. Ergänzungsband, 1. Heft /1935/, 1–68.

Sinor, D.: Dix années d'orientalisme hongrois/1940–50/. In: Journal Asiatique 239/1951/, 211–235.

Hungarian Publications on Asia and Africa, 1950–1962; A Selected Bibliography; Compiled by E. Apor and H. Ecsedy; Edited by L. Bese. Budapest 1963.

三、個人的業績の目録

Budenz József irodalmi munkássága. In: Budenz Album, Budapest 1884, 317–321.

Benedicty, R.: Die literarische Tätigkeit von Gyula Moravcsik. In: Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae 10/1962/, 295–313.

Bibliographie des oeuvres du Prof. L. Ligeti. In: Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae 15/1962/, 7–13.

Czeglédy, K.: Prof. L. Fekete. In: Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae 13/1961/, 3–8.

Fokos, D.: Munkácsi Bernát irodalmi munkássága. In: Magyar Nyelvőr 59/1930/, 172–178.

Hazai, Gy.: Armin Vámbéry 1832–1913; A Bib-bibliography; Budapest 1963/Micropublications of the Library of the Hungarian Academy of Sciences 3/.

Hazai, Gy.: Gyula Németh'in eserleri. In: Németh Armağanı, Ankara 1962, 15–41.

Munkácsi, B.: Professor Hermann Vámbéry/1832–1913/. In: Ungarische Rundschau 3/1914/, 513–522; 4/1915/, 88–113, 386–408.

Németh, Gy.: J. Thury. İstanbul 1950.

Zsirai, M.: Bibliographie der Arbeiten von Professor Zoltán Gombocz. In: Ungarische Jahrbücher 15/1936/, 376–384.

注

(1) これは、第八回国際人類学民族学会議（一九六八年九月三―一〇日、東京・京都）に参加のため来日されたジョルジュ・ハザイ(György Hazai)博士が、一九六八年九月一七日、東洋文庫で行なわれた講演草稿に補足を加えられたものである。補足の部分は、訳者あてにトルコ文・英文で送付され、博士の指示にしたがって、訳者がこれを適当な部分に挿入した。訳者の怠慢のため発表がいちじるしく遅れたことにたいし、博士にふかくお詫びしたい。また各節分けも、訳者が意をくんで行なったものである。

(2) 以下、煩雑を避けて、たんにチュルク学とする。

(3) Gombocz, Z.: Die bulgarisch-türkischen Lehnwör-

ter in der ungarischen Sprache; Helsinki 1912/Mémoires de la Societé Finno-Ougrienne XXX/.

(4) A magyar nyelv történeti-etimológiai szótára. I. Budapest 1967.

(5) Németh, Gy.: A honfoglaló magyarság kialakulása. Budabest 1930.

(6) Moravcsik, Gy.: Byzantino-Turcica. I–II. Berlin 1958.

(7) Győrffy, Gy.: Az Árpád-kori Magyarország történeti földrajza. Budapest 1963.

(8) Fekete, L.: Die Siyāqat-Schrift in der türkischen Finanzverwaltung. I–II. Budapest 1955.

(9) Németh, Gy.: Zur Einteilung der türkischen Mundarten Bulgariens. Sofia 1956.